

越谷市文化連盟

平成16年度

『こしがや文化芸術祭』

平成17年2月27日（日） 11:00~17:00

NPO法人・越谷市郷土研究会
展示部門出品紹介

於 越谷コミュニティセンター ポルティコホール

『新発見！林泉寺の「新六阿弥陀」扁額』 加藤 幸一

『浅間山の噴火と越谷』 金岡 由紀子

『越谷周辺の近代交通のあけぼの』 山本 泰秀

新発見！林泉寺の「新六阿弥陀」扁額

加藤幸平 一

「新六阿弥陀」札所の御詠歌が刻まれた、縦三十九センチ、横六〇・五センチの扁額が、平成十五年の春に林泉寺の物置より発見されたもので、その後、塗り替え等の修復をした。これは、江戸時代の天明八年（一七八八）に船渡村の受道によって始められた「六阿弥陀」詣での当時の本堂正面に飾られていたと思われる扁額である。

江戸時代、江戸の町で盛んに行われていたのが六阿弥陀詣である。阿弥陀如来像を安置している六ヶ所の寺院を春と秋の彼岸に巡拝する信仰である。明六ツ（午前六時）に自宅を出て一巡六里（二十四キロ）といわれる距離を巡拝し、暮六ツ（午後六時）に帰った。この越谷地域にも江戸の六阿弥陀詣でをまねて「新六阿弥陀」詣でとして行われたのである。住職の木村恵俊氏によると「旧本堂が昭和四十四年に取り壊された時に、解体保存された仏像や様々な備品が物置に保管され」「平成五年に新客殿が落慶された後、物置の中の物を整理しながら追い追い取り出していると平成十五年にこの扁額が現出した」という。

この扁額に関して木村氏は、「かつては、巡礼参拝者が本堂正面の向拝（こはい）の下でこの扁額を仰ぎ、和讃を唱えてお参りしていただいていたものと拝察」するとしている。また、林泉寺の門前に「新六阿弥陀二番」と刻まれた標識石塔があるが、このような扁額が「いずれの「新六阿弥陀」霊場の寺院にもあって、門前の石標（標識石塔、全ての石標に船渡村の『受道』の名前が願主として刻まれている）と同様に参詣者に示されていたものと推測」している。全く同感である。この扁額に刻まれた御詠歌は次の通りである。

新六阿弥陀二番札所
（唱うる）
南無阿弥陀となふる
（功德）（増林）
くこくましはやし
二世あんらくの
（誓い）
ちかいたのもし
天明八申年六月朔日
願主 船渡村 受道

新六阿弥陀二番札所
南無阿弥陀となふる
くこくましはやし
二世あんらくの
ちかいたのもし
天明八申年六月朔日
願主 船渡村 受道

願主の名が刻まれた創設当初の扁額が今日まで残っているのは、とても珍しく貴重である。なお、越谷市内の六阿弥陀の六寺院は次の通りである。いずれも浄土宗寺院である。

- 新六阿弥陀二番は、増林の林泉寺
- 新六阿弥陀四番は、平方の林西寺
- 新六阿弥陀六番は、大松の清浄院
- 新六阿弥陀三番は、登戸の報土院
- 新六阿弥陀五番は、大泊の安國寺

三番を除くすべての寺院には、「新六阿弥陀何番」と刻まれた標識石塔が現存する。報土院には、「東京西ヶ原（江戸の六阿弥陀の三番）寫」と書かれた後世の扁額が保存されているので、報土院が三番と確定できるが、かつてあったであろう標識石塔は現存しない。一番は不明であるが、当時勢力のあった越ヶ谷町の浄土宗寺院、天嶽寺と思われる。標識石塔は現存していないが、天嶽寺において他には考えにくいからである。

またこの地域の六阿弥陀めぐりも、太陽が東から南、西へと回るのを模して、時計回りに六里強の道のりを巡拝していたことがわかる。

浅間山の噴火と越谷

金岡一由紀子

昨年九月から十一月にかけて長野県と群馬県の境にある浅間山が数回にわたって小噴火をした。十一月十四日の噴火では、越谷にも微細な灰が飛来し、屋外に駐車した黒い乗用車等は、浅間山の灰が薄っすらと確認できる程であった。

さて、江戸時代の越谷にも浅間山の噴火による降灰の記録があるのでご紹介しよう。二百二十二年前の天明三年（一七八三）の「浅間・火坑燃」について書かれた古文書《福井猷貞（ゆうてい）著『大沢猫の爪（つめ）』》である。次のとおりである。

一、同年（天明三卯）七月上旬、信州浅間山火坑燃、関東灰砂降、七月七日之頃灰降、七日之夜中ヨリ震動、雷電ニて八日昼過迄砂降候事二、三寸。昼行燈付申候事・・・。

つまり、現代の暦で言うと、八月十五日の頃、夜中から地震や雷鳴が起こり、真夏の昼なのに外は暗く、『行燈（あんどん）』が必要だった、と云うのである。越谷で降った灰が『二、三寸』というのだから、7センチから10センチの降灰である。当然、田畑も家も灰に埋まっている。

関東地方はこの前年も冷夏であったことが、次のように記録されている。

此前年、夏寒気強、青立二成、五穀不実、引続疫癘（えきれい）流行也・・・。

夏が冷たかった為に『青立（あおだち）』《稲などが実らないままに青く立って生えている状態》になり、『五穀』は不作で伝染病が流行ったと云うのである。

天明二年に始まる『天明の飢饉』に追い打ちをかけるような浅間山噴火であった。

越谷周辺の近代交通のあけぼの

山本素次郎

我が国で最初に自動車を行行した始まりは、明治三十年（一八九七）のことで、横浜在住の外国人エベリーハイム氏が米国から輸入した蒸気自動車「オリエント号」を横浜で走らせたとされる。三年後の明治三十三年（一九〇〇）、明治屋洋酒店が英国製「アーカル号」で商品の運搬を始める。これには「警視庁番号一」が付与され、我が国の貨物運送業の始まりとなる。その後、明治三十七年（一九〇四）五月七日、国産自動車第一号の蒸気自動車山羽虎夫によって開発され、中国路の岡山の中心街を走行した。それから次々と新しく交通史が書き加えられていくが、そのうち越ヶ谷との関わりの深い人物、岡庭善一氏と黒田酉蔵氏について簡単に紹介する。

岡庭善一氏は、明治二十六年（一八九三）四月二十三日、旧・八木郷村長登呂（現、三郷市長登呂）で生まれ、大正初期には、芝浦の運転手の養成所で運転免許証を取得（実地試験は日比谷交差点周辺）し、自家用車も所有していた。その後、彼は大阪に赴いて自動車運転手養成所を開設し、大正七年（一九一八）頃まで教習の指導にあたったという。その後は、埼玉に帰省し、バス会社の設立準備に取り掛かったようである。大正九年（一九二〇）四月、越ヶ谷町に新たに越ヶ谷駅が開設するに伴い、八木郷村から越ヶ谷駅前引越し、十二月には越ヶ谷駅を中心とした越ヶ谷乗合自動車の運行を越ヶ谷・吉川間で始めたのである。後に、岩槻、野田方面へと路線を拡大していった。

黒田酉蔵氏は、弥十郎村の生まれであるが、千住久喜間の東武鉄道が開通した翌年の明治三十三年（一九〇〇）から開通当初の越ヶ谷駅（後の武州大沢駅、今の北越谷駅）前で乗合馬車の営業（吉川方面、蒲生方面、定使野や堂面橋を経由しての金杉方面）を始めていた。大正九年に今の越ヶ谷駅の地点に越ヶ谷駅が開設された時に、乗合馬車の営業拠点を今までの旧・越ヶ谷駅（後の武州大沢駅、今の北越谷駅）からこの越ヶ谷駅に変え、自らも旧・越ヶ谷駅前より越ヶ谷駅前に住み替えた。そのために、越ヶ谷・吉川間での乗合自動車と乗合馬車とが競合することになった。

当時の越ヶ谷・吉川間の道は、元荒川添いの土手道（大相模の不動尊の裏側）で、道幅は狭く、曲がりくねっていた。乗合自動車の発車運行時刻の五分前に乗合馬車が出発していたが、途中、西方の大聖寺（大相模の不動尊）近くで、乗合自動車が乗合馬車に追いつく状況だった。ちょうどこのあたりは、道幅が狭く、曲がりくねった道で、乗合自動車が追いついたものの、馬車を追い越せないでいた。また、馬は途中で糞尿を排泄するたびに止まるという始末であった。早いはずの乗合自動車は、吉川に着くのは馬車と同時になってしまうのが常であった。このような状態が半年間も続いた。そこで、双方が話し合い、大正十年に、岡庭氏がバス業を、黒田氏が乗合馬車をやめてタクシー業を行うということで決着した。

岡庭善一氏の越ヶ谷自動車は、昭和十六年（一九四一）に柏と大宮間の総武鉄道（現、東武野田線）に譲渡され、総武自動車となる。戦時中の昭和十九年には、東武鉄道が総武鉄道を吸収合併すると、総武自動車は東武自動車に組み入れられた。

[聞き取り調査のご協力者及び主な参考文献]

岡庭正樹氏、黒田清康氏、井橋順一氏のご協力を得ましたことを深く感謝申し上げます。
「日本自動車史と梁瀬長太郎」(昭和31年)、越谷今昔物語「(昭和31年)」、総武鉄道事業報告「(昭和31年)」

越谷市郷土研究会に入ってみませんか！

NPO法人・越谷市郷土研究会とは

(平成十七年二月現在)

◎史跡めぐりなどのイベントを毎月実施し、また、毎年、越谷市民まつり・

越谷市民文化祭・こしがや文化芸術祭に展示部門で参加しております。

また市立図書館にて、昨年十二月一日から十九日の期間に「三ノ宮卯之助の力石」の展示を行いました。

◎二月十六日(水)から三月六日(日)の期間に、市立図書館にて「江戸時代の越谷」の展示を行っています。

◎当会は、昭和四〇年(一九六五)三月に発足しました。

以後地道に活動し、現在は会員数が三〇〇名を越えるの大所帯となりました。

ほぼ毎月行われる史跡めぐりは三三七回を数えるまでになりました。

◎平成十六年一月二十四日に

『NPO法人・越谷市郷土研究会九△△』

の設立総会を開き、五月二十七日に法人格を取得し、正式に発足しました。

◎当会の最近の主なイベントをあげますと次のとおりです。

平成十六年一月二五日(日) 講演会「下間久里の獅子舞」

平成十六年二月二九日(日) 江ノ島方面(江ノ島神社、七里ヶ浜、卯之助力石)

平成十六年三月二五日(木) 古河方面(鷹見泉石記念館、桃祭り、渡瀬遊水池)

平成十六年三月二八日(日) 市内・大袋地区の史跡めぐり

平成十六年四月一三日(火) 越谷鴨場見学

平成十六年四月二四日(土) 最後の水戸藩主・徳川昭武の邸と庭

平成十六年五月三〇日(日) ベリー来航一五〇〇年・日露戦争一〇〇年

平成十六年六月二〇日(日) 埼玉県立民俗文化センターの公演・団体鑑賞

平成十六年七月一六日(金) バス史跡巡り・卯之助力石を横浜川崎に訪ねる

平成十六年八月二九日(日) 記念講演会「日本の江戸力持、三ノ宮卯之助」

主催は、越谷市教育委員会とNPO法人越谷市郷土研究会、後援は越谷市立図書館

平成十六年十一月二四日(日) 足利方面(まちなか遊学館・足利学校・饒阿寺)

平成十六年十一月九日(火) 国立歴史民族博物館・明治維新と平田国学

平成十六年十一月二八日(日) 中山道・桶川宿と日本最大の卯之助力石

平成十六年十二月一六日(木) バス史跡巡り・千葉県の城めぐりと卯之助力石

平成十七年一月三日(月) 恒例の七福神めぐり(下谷方面)

平成十七年一月二三日(日) 歴史講演会・「越ヶ谷宿(越ヶ谷町・大沢町)」

平成十七年二月二六日(土) 永田町・霞ヶ関・日比谷・汐留・芝の増上寺

◎郷土研究会ニュース「りせ」の発行

◎会報「古志賀谷」の隔年の発行(B5版、百十〜百五十頁程度)及び無料配布

内容には主に会員による郷土の調査・研究の報告や随想の寄稿文などです。

※なお、以上の他に、越谷市社会福祉協議会への寄付活動なども行ってきました。

◎会費は、年間二千元(四月〜翌年三月、会報・諸案内状・諸会議費等)です。

どなたでも気楽に入会できます。市外の方でも歓迎致します。

◎申し込みは、はがきに「平成何年度より入会」とお書きのうえ、住所・氏名・

電話番号をご記入し、下記までお寄せ下さい。

または、当会の各種行事の際に、郷土研究会役員までお申し込み下さい。

〒343-0806 越谷市 宮本町 三一一七七八 谷岡隆夫方

越谷市郷土研究会九△△

☎〇四八一九六二一七五二七